

マタイによる福音書5章17-20節 「私たちと律法の関係」

1A 成就する律法と預言 17-18

1B 成就者イエス 17

1C 律法において

1D 律法の下に生まれた方

2D 律法の意図を行われた方

3D 律法の要求を満たされた方

2C 預言において

1D 律法にある型

2D 預言の言葉の成就

2B 律法の十全性 18

1C 全ての靈感

2C 不動不変の言葉

2A 律法の教師 19-20

1B 律法の遵守 19

1C 聖く、正しい律法

2C 霊的な律法

3C 十字架に導く律法

4C 御霊による満たし

2B 律法学者やパリサイ人にまさる義 20

1C 外側の行いによる義

2C 自己義認

3C 言い伝え

本文

マタイによる福音書5章を開いてください。私たちの山上の説教シリーズは、5章17節に入ります。17-20節までを読んでみます。「17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。19 ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」

私たちは、イエス様が神の国にいる者たちの姿を、このような者なのだという特徴を挙げることによって宣言されたところを見ました。八つの幸いを語られ、そして世に対してどのような影響をもたら

すか？について、「あなたがたは地の塩です」「世の光です」と言われました。そしてイエス様は具体的に、どのように生きなければいけないかについて語って行かれます。その時に大事になる言葉は、「義」であります。義に飢え渴く者は幸いです、とイエス様は言われ、そして義のゆえに迫害される者は幸いです、とも言われました。そして世の光として生きるにあたって、良い行いによって人々が神をあがめるようになることも語られました。神の正しさの中に生きていくことによって、その使命を果たしていくことができます。

ユダヤ人にとって、正しく生きることの物差しは「律法」です。それは神の教えのことであり、具体的にはモーセによって与えられた律法です。十戒を神がシナイ山において与えられ、そしてその適用である様々な定めや教えを、神はイスラエルの民に与えました。それらの教えの言葉を律法といい、ヘブル語ではトーラと言います。もっと分かり易く言えば、神の語られる言葉、御言葉に従うことによって、義の中に生きるということです。私たちキリスト者が、なぜ聖書をとても大事に抱え、これを読み、そして祈っているのか？といえば、神の言葉によって生きることによって、初めて神の喜ばれる生活をするからです。自分の気持ちや感覚、あるいは自分の考えや思いにしたがって生きても、それは自分の正しさかもしれませんが、神の正しさではありません。自分の正しさにしたがって生きるなら、その世界は悪に満ちたものになるのは、ノアの時代の世界の状態で自ずと明らかです。神のみが正しい方であることを聖書は明らかにしており、ゆえに、この方の口から出て来る言葉によって生きることこそが、正しい生き方であることを知っています。

1A 成就する律法と預言 17-18

1B 成就者イエス 17

そこでイエス様が言われました、「**17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。**」なぜ、廃棄するために来たのではないとわざわざ断っているかと言いますと、ユダヤ人からはそのような非難や批判が既に出てきていたからです。イエス様はこの時点で、かなり多くの群衆がついて行っています。それでユダヤ教の指導者たちが、彼が正しい教師なのかどうか調べに来ています。驚くのは、イエス様は大工の子であり、正規の律法の教育を受けていません。けれども、あまりにも知恵のある言葉、また権威ある言葉を語っておられます。そして、当時、ユダヤ人の中では彼らこそがモーセの律法の体现者であり、義の基準とされていた、パリサイ派や律法学者を、真っ向から批判していたことです。また、こうやらないといわれていたしきたりを、破っておられました。弟子たちが食事時に手を洗わなかったり、安息日に麦畑から穂を摘んで食べたりしました。さらに、罪人とされていた取税人や遊女とも共に食事をされています。ただ彼らの定めたしきたりを破っているだけでなく、それをわざと破っているかのようにさえ見えたのです。それで、律法の破壊者のように見えたのです。

イエス様だけでなく、使徒の働きではステパノが、モーセと神を冒瀆しているとそしられ、使徒パウロもわざと罪を犯すようなことをさせているとして、中傷していました。このようにして神の恵みの福音は、律法を廃棄しようとしているとして誹りを受けます。三浦綾子さんの本のどこかに書いてありましたが、「日曜日に教会で罪を赦してもらえるから、とつてもいいわ」など言っている人がいたとのこと。

そう罪が赦されるから、罪を普段、犯していても救われている、天国に行けるといふ教えであると勘違いされやすいですね。そこでイエス様ははっきりとさせました。「**廃棄するためではなく成就するために来たのです**」廃棄ではなく、正反対でむしろ成就するために来られたというのです。悪を行うようにしたのではなく、その反対で律法の義を確立するために来られたのです。

1C 律法において

まず大事なことは、私たちが義を行うかどうか？ということ以前に、イエス様ご自身が律法にある義を満たされたということでもあります。旧約聖書には、律法があり、そして預言者による言葉がありますが、それらについて、イエス様は「わたしのことを証言している」と大胆にも発言されました。「ヨハ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。」これは、驚くべき発言です。旧約聖書について書かれてあること、その律法や預言書にあるものは全て、イエスのことを証言しているのだということなのです。(ですから、私たちは旧約聖書をととても大事にします。私たちの主イエスは、福音書だけに出て来る方ではなく、聖書の初めから終わりまでに証しされている方だからです。)そして、その証言していた実際の人物がこの世に現れたのですから、それによって中身が満たされたと言ってよいでしょう。

1D 律法の下に生まれた方

イエス様は具体的に、律法をどのように満たされたのか？という質問については、まず、パウロがガラテヤ書でこう話しています。「ガラ 4:4-5 しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者として遣わされました。それは、律法の下にある者を贖い出すためであり、私たちが子としての身分を受けるためでした。」イエス様は、律法の下のある者として生まれたとあります。つまり、律法を守るユダヤ人の中に生まれたということです。ヨセフとマリアは、イエス様が生まれたら八日目に割礼を受けさせ、また捧げるためにエルサレムにまで行きました。彼らはいけにえも、律法に従って捧げました。そうやってイエス様は、律法を守り行なう家庭の中で生き、他のユダヤ人と何ら変わることなく生きられたのです。そのことによって、ユダヤ人たちがこの方を自分たちの救い主、メシアとして受け入れ、救われることができるようにされました。私たちも、いかがでしょうか、自分と同じような境遇にまで降りてくれるからこそ、その人のことを信頼できますね。イエス様は、律法の下にある者として遣わされたのです。

2D 律法の意図を行われた方

そしてイエス様は、律法の目標としていることを、その本質を見失うことなく行われました。「ロマ 10:4 律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。」イエス様が行われているところを見れば、律法を目指しているところを見ることができます。

例えば、安息日。弟子たちが畑の中を通っていた時に、麦を少し摘んで食べていた所、パリサイ派の人たちが咎めました。けれども、イエス様はダビデの話がされます。彼がサウルから逃走して、ひもじかった時に、祭司しか食べることのできないパンを、祭司は彼に与えました。そこには、人々に対する良きわざ、神の憐れみが示されています。「マルコ 2:27 安息日は人のために設けられたのです。」

人が安息日のために造られたのではありません。」とされています。安息日は、人が休み、神からの来たものを感謝するためのものであり、安息日に関わる規則でがんじがらめにしているならば、人が安息日というもののために造られてしまっているという本末転倒になります。イエス様は、細部について守ろうとしているが、「マタ 23:23 律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。」と批判しました。イエス様は、律法の本当に意図していることを行われ、その目的を達成された方でした。

3D 律法の要求を満たされた方

ここまででは、一般の人々でも分かり易い話かもしれません。イエスが神の命令を行われて、その大事なことも行われたということですから、模範的な教師のように見る事ができるでしょう。けれども、イエス様が律法を成就されたということで最も大きな部分、驚愕することは、律法の要求する死をご自分の身に受けられたということです。「ロマ 8:3-4 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求を満たされるためなのです。」御子が私たちと同じ肉の姿を取ってください、その肉において律法の要求する死を、私たちのために身代わりに受けてくださったのです。律法をご自分で守られただけでなく、私たちが犯した律法の違反に対する処罰を、身代わりに受けてくださいました。ですから、すでに律法の要求するところをイエス様がご自分の死によって満たしてくださったので、それで私たちがイエス様を心に受け入れたなら、律法の要求を満たしてくださった方によって、私たちも義と認められるのです。

イエス様は、姦淫の現場で捕らえられた女について、「わたしも罪に定めない」と言われました。律法に従ってパリサイ人たちが石を投げつけようとしたのですが、イエス様が、「罪のない者がまず、石を投げなさい。」と言われたのですが、彼らは自分に罪がないと言えなかったのです。そしてイエスこそが唯一、罪を犯したことの無い正しい方だったのに、この女を赦されたのです。どうしてか？ご自身がその生涯において、人類のための罪のいけにえとして、十字架上で死なれるからです。

2C 預言において

そしてイエス様は、「**律法や預言者**」とされています。律法だけでなく預言者とも言っています。これは、イエス様のことが予め語られていたからです。

1D 律法にある型

預言には、言葉によるものと、ある人物や状況、祭りやいけにえなど、「型」として預言しているものがあります。型とは、本物を予め示すためのものですね。プラモデルは、そうですね。戦車のプラモを作っていたら、本物の戦車を指し示しているのです。律法には、そのような型による預言、これを予型と言いますが、無数にあります。

例えば、ヨセフの生涯があります。彼は兄に初め殺されそうになって、エジプトに売られますが、そこで総理大臣となります。そして兄たちがエジプトにやって来た時に、彼の前で兄たちがひれ伏すのです。初めキリストは、仲間のユダヤ人たちに殺されます。けれども、よみがえり天に昇られました。二度目、天から来られる時は、ユダヤ人たちはイエスを王として迎え入れ、ひれ伏します。過越の祭りもそうですね、屠られて血が流される子羊はキリストを表していました。そのことによって、神の怒りがイスラエルの家を過ぎ越しましたが、同じように、キリストの流された血を自分のものとして受け入れている者たちは、神の怒りを免れて、救われることができます。

2D 預言の言葉の成就

そして直接の預言は、例えばベツレヘムに生まれるという事がミカ書にあります。ガリラヤで宣教活動をする事が、イザヤ書にあります。三十枚の銀貨で引き渡されることについて、ゼカリヤ書にあります。十字架上で、兵士たちが着物をくじ引きしていたのは詩篇にあります。このようにして、イエス様は聖書に書かれていること、預言を成就するために来られました。人によって数え方が違うので数が変わりますが、イエス様が初めに来られた時の預言は三百を超えると言われます。そして再臨については千五百以上あると言われます。それらを成就するために来られました。

2B 律法の十全性 18

そこでイエス様は、「**18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。**」と言われます。律法が廃棄されるどころか、一点一画も消え去ることはないとのことです。

1C 全ての靈感

ここでの一点一画というのは、ヘブル語のアルファベットから来ています。「一点」というのは、「イ」とか「ヨ」の発音となる「ヨッド」を表しています。そして「一画」というのは、少し角の部分のはみ出しているかないかで、決まって来ます。その一点や一画があるかないかで、全く異なる文字になったり、単語になったりするのです。ヘブル語においては重要な要素になります。イエス様は、これらの文字一つ一つでさえ、決して消え去ることはないと言われるのです。つまり、イエス様は神の律法について、何かを付け足したり、改良したりしたのではなく、全くその反対で、律法のそのままを伝えておられたのです。

イエス様は、律法について、つまり聖書について、全くすべてがその通りになる、つまりすべてが神の言葉だと捉えておられます。部分的に神の言葉で、他は人の考えたものだという考えは、これっぽちもなかったのです。パウロもこの聖書信仰を受け継いでいて、こう言っています。「**Ⅱテモ 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。**」すべてが神の息が吹きこまれたもの、神の口から発せられたものだということです。

2C 不動不変の言葉

そして、「**天地が消え去るまで**」消え去ることはない、と言われています。他の箇所でも、終わりの日

について語られた時に、イエス様はご自分のことばは、天地が過ぎ去っても、過ぎ去ることはないことを言われました。今の天と地が揺れ動いて、過ぎ去っても、それでも残っているのです。これはすごいことです。どの時代にも、そのまま残っている言葉です。ですから、「時代が変わったのだから、私たちの聖書の読み方も変えない」とか言って、例えば同性婚を認めて行こうという流れがあったりするのですが、私たちはそうやって神の言葉を変えてしまうことのほうが、恐れを抱きます。神のことばは決して動くことなく、変わることはないからです。

2A 律法の教師 19-20

こうやってイエス様は、律法を廃棄しようとしているという批判に前もってご自身で答えられました。そして19節からは、律法を行うことを教えているところです。

1B 律法の遵守 19

「19 ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。」ここにも、全く律法に対する信頼があります。「ここは破ってもいいから」と、大したことがないようにみなしたら、自分自身が御国で大したことの無いもののようにみなされます。そしてしっかりと行なうように教えるものは、偉大な者と呼ばれます。ですから、聖書は包み隠さず教えておかなければいけないと、いつも感じています。

1C 聖く、正しい律法

律法を教えることによって与えられる便益は、神の聖さ、正しさが明らかにされます。「ロマ 7:12 律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。」ですから、私たちが十戒を始めとして、律法を読むと、これまでのぼやっとしていた神の御姿がはっきりしていきます。そこには神の聖さと正しさが見えてきます。

2C 霊的な律法

しかも、その正しさというのが、霊的なものであり、自分の心の奥深くまで探るようなものです。「ロマ 7:12 私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。」律法が外側の行いを取り扱っているだけでなく、それ以上に自分の心のあり方を探るものなのです。ですから、パウロは、律法においては非の打ちどころがないと言ったのに、律法が霊的なものであることを知って、「7:14 私は肉的な者であり、売り渡されて罪の下にある者です。」と告白しているのです。

3C 十字架に導く律法

そこで律法がどんな働きをするのか分かって来ます。それは、自分がそれを行って正しくなるということではなく、むしろその反対で、自分がいかに罪を犯す者であるのか、罪深いかを明らかにするものであります。そして、自分には何ら良いものがなく、ただ神の憐れみをすがりしかなくなるのです。それが神が願っておられることなのです。「ガラ 3:24 律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。」律法によって、私たちがいかに、キリ

ストの十字架が必要かを知ります。私たちは 21 節から、イエス様がどのように律法を教えて行かれるかを見て行きます。それは、殺してはならないというのは、兄弟を馬鹿だと言ったらそれで最後の審判で裁かれること。姦淫の罪は、情欲をもって女を見続けたら、それでゲヘナの火に投げ込まれるのです。ですから、私たちはすぐにでも、神の憐れみを請うためこの方の下に行き、そしてキリストがその神の裁きを身代わりに受けてくださったことを信じ、受け入れることができます。

4C 御霊による満たし

ですから、律法は、まずキリストが全ての律法の要求を満たしてくださったことを知ることであり、また自分自身が罪深いことを知ることで。そしてキリストの十字架によって、罪の贖いが行われることを知ることができます。

そして私たちキリスト者は、そのことを信仰をもって受け入れると、聖霊が注がれることを約束されています。そして新しい契約において、これまで石の板に書かれていた律法が、心の中に書き記されることを約束しています。つまり、心の一新が御霊によって与えられるのです。もはや、神に認められるために律法を行おうとするのではなく、神が一方的に愛してくださったから、その愛に感動して、神に従いたいとねがいます。先ほど読んだ、ロマ 8 章 4 節です、「それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。」律法の要求が、私たちの内に満たされます。私たちによって満たされるのではないのです。完成されたキリストが私たちの内にいることによって、御霊に導かれることができます。

2B 律法学者やパリサイ人にまさる義 20

そしてイエス様は、驚くべき発言をされます。「20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」律法学者やパリサイ人に義にまさる、ということです。当時、ユダヤ人にとっては、律法についての義、神にとっての義を体現しているのは、律法学者やパリサイ派の人たちだと思っていました。ところが、彼らの義にまさらないと天の御国には入らないということです。

律法学者の最初の人はエズラです。エズラは、帰還した民がもう金輪際、偶像礼拝をすることがないように、律法をずっと読み聞かせていました。そしてその学者が律法が言っていることを解釈して、ユダヤ人庶民はそれを受け入れていました。パリサイ派も、神殿がバビロンによって破壊されて、それでラビ、ユダヤ教の教師を中心にして律法の解釈を学んでいきました。「パリサイ」は、分離した者という意味で、律法を守らない者たちから分離していることを意味しています。紀元後 70 年にローマによって神殿が破壊されてからは、この人たちが現代に至るまでユダヤ教の主流となりました。ラビ的ユダヤ教とも呼ばれ、またユダヤ教正統派の人たちです。ですから、彼らの義よりも優っていないと、御国に入れないということは一体どういうことなのでしょう？

1C 外側の行いによる義

パリサイ派の人たちは、その「義」が外側の行いによる義であります。外側で行っていること、人が

見えるところで正しければ、それでよしとしたのです。心の中でなんと思おうが、それは放置されていた状態でした。そこでイエス様は、心の中で思ったことだけで、すでに律法に違反していることを教えて行かれるのです。

2C 自己義認

そしてパリサイ派の教えは、一見、厳しそうで、実は自分たちに都合の用意ように解釈している面があります。イエス様のほうが、律法は一点一画、決して消え去らないと言われたので、もっと厳しい立場を取っていると言えるでしょう。しかし、パリサイ人たちは自分たちが何とか守れると思えるような基準を持っているので、結局は自己義認に陥ってしまうのです。その代表的な話は、パリサイ人と取税人の祈りです。「ルカ 18:11-12 パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』」こういった外側の形だけの守り方をしていると、結局、自分自身がいかにか正しいか？ということになってしまうのです。

けれども、いかがでしょうか？私たちが何かしかり、守って行かなければいけないとして、自分がそれができないから救われていないのだとか、自分はクリスチャンとしてだめだ、とか考えていたら、本当にできた時に、そこには出来たというぬぼれしか残らないのです！

3C 言い伝え

そしてパリサイ派や律法学者の義とは、「人からの言い伝え」がありました。むしろそっちのほうが熱心で、神の戒めがないがしろにされている面がありました。イエス様は、「マルコ 7:8 あなたがたは神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っているのです。」いろいろな細かいことは守っているのですが、例えば、両親を扶養しなければならぬのに、「コルバン」と言えば、扶養をしなくてもよくさせていました。このように、私たちにも何か人からの聞いたことを大事にして、神から聞いていることが横に追いやられていることがあります。

こうやってイエス様は、律法を守ることを具体的な事例を通して語って行かれます。その時にぜひ、ここの箇所を思い出してください。パリサイ派や律法学者より優れた義でないと天の御国に入れないのですから、彼らよりももっと厳しい人間観を持っています。自分たちはどうしようもない罪人であることに立脚することです。ですから、律法ももっと自分の心が新たにされているから、それで神の命令として従うことができるようにされます。「ヨハ 1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」恵みとまことによって、律法を行うということに意味が変わりました。そしてその中にしっかりと留まっている必要があります。